

キリスト教とその音楽

「光陰矢の如し」とはよく言ったもので、一年のたつのはあつという間である。一年の締め括りにあたる年末はどの国でも忙しいが、オーストリアの情景も例外ではない。

十二月八日の宗教祭日（聖母マリアが無垢受胎した日）に店を開けて商売をするか否かの議論がもちあがるのも、毎年変わりがない。この日がたまたま土曜日と重なったりすると大変だ。ふだんのようにお昼で営業が終わってしまうのではなく、午後も目一杯商売する事が特別に許可されているクリスマス前四回の土曜日は、商人にとって貴重なかきいれ時である。にもかかわらずこの日が「祭日のためお休み」では立つ瀬がない。その上都合の悪い事にはこの宗教祭日、お隣り西ドイツでは実施されず平日のままである。ザルツブルクなど国境に近い町からはこれを利用してドイツに出かけ、自国よりも多少物価の安い隣国での買い物を楽しむ人が多い。そのためこの日は特にドイツとの国境でオーストリア税関の検査が厳重になる。

オーストリアのようにカトリック勢力の強い国では、国民の生活リズムもキリスト教を中心にして刻まれる。イエス・キリストの誕生を祝う十二月のクリスマス、全人類の罪を背負って死んだイエスの苦しみを共感する過越大祭期と、その後のイエスのよみがえりを祝う復活祭、そしてイエスの教えを世界に広めるべく、イエスの復活後五十日目に聖霊が天より降りて来たことを祝う聖霊降臨祭とは、中でも大きな節目となっている。

クリスマス前四回の日曜日に祝われる「アドヴェント」ではアドヴェントクラウンツと呼ばれる飾り環に立てられたろうそくに灯をとます。毎週一本ずつその数を増して明るくなっていく灯火は、刻々と近づいてくる救いの光が次第に強くなってく様子を表わしている。

前述十二月八日の祭日以外にも、十二月二十四日のクリスマス・イヴに向かっていろいろな思い入れのあ

る日々が続く。

十二月四日は聖バルバラの日。この日に手折られ、水に活けられた桜の小枝のつぼみが見事二十四日の聖夜に花咲けば、次の年には何か特別良い事が起こると言われている。

六日は聖ニコラウス（サンタ・クロース）が来る日、十三日は聖ルチアの日である。聖ルチア（サンタ・ルチア）はサンタ・クロースの女性版で、昔のチロル地方などではサンタ・クロースは男の子に、サンタ・ルチアは女の子に、一年間良い子であったご褒美としてお菓子や果物をあげる習わしだったようだ。

二十一日は聖トーマスの日。そのほかクリスマス前三回の木曜日には他の日とは少し違った雰囲気があり、クリスマス前の九日前には特別のミサが行なわれる。十七日から二十四日までには「ローラーテ聖祭」といって深夜または早朝まだ暗いうちにミサが営まれる。

二十四日の夜、聖夜には真夜中に「ヴァイナハツ（クリスマス）メッセ」と呼ばれる聖祭が行なわれ、クリスマスに興奮と喜びは最高潮に達するのである。

宗教には何かと音楽がつきものである。一口に宗教といってもキリスト教ばかりでないのももちろんだが、「宗教音楽」というと、一般にはまずキリスト教的音楽や教会音楽を意味する事が多い。

その中でも一番身近なのは「（教会）カンタータ」と呼ばれるものだろう。アリアやレチタティーヴォのような独唱曲、コラールと呼ばれる合唱曲、また重唱の曲など幅が広い。単にカンタータといえば、特にキリスト教に関した内容の物ばかりとは限らないが、歌詞のテキストを聖書の中の言葉などから選んだものは、広く教会でのミサや毎日曜日、宗教祝祭日の礼拝用音楽として、庶民の間にも深く浸透していった。

このように歌を活用した音楽の中でも大がかりな物のひとつに「オラトリオ」という一群がある。ちょうど普通のオペラから演技と、役に合わせた衣裳とを省略したようなもので、ソリスト（歌手）、コーラスとオーケストラが一体となつてのコンサート形式で行なわれる。J・S・バッハ作曲の「クリスマス・オラト

リオ」はまさに十二月にマッチした作品であろう。その他で有名なものには——特別にクリスマス的ではないが——ヘンデル作曲の「メサイア（救世主）」「マカベウスのユダ」などがある。

キリスト教に関した内容の音楽作品を見渡した際に一番目立つのは、やはりイエス・キリストの受難と復活に題材を求めたものである。イエスの誕生もめ度たい事ではあるが、受難と復活ほどのドラマ性は持ち合わせていない。このドラマを扱った大がかりな作品（オラトリオ）には特に「受難曲」という名称が与えられている。前述バッハの「マタイ受難曲」や「ヨハネ受難曲」などは有名で、同名の福音書をもとに作曲されている。

「ミサ曲」というものもある。ミサとは厳密には「キリストの死と復活の記念祭儀」であり、教会に託された最も大切な儀式である。カトリックのミサはラテン語で行なわれ、（プロテスタントではその国の国語が使用される）その順序は次の通りである。

入祭唱 ↓ 憐れみの賛歌「キリエ」（キリエ・エレイソンとは「主よ、憐れみたまえ」の意） ↓
栄光の賛歌「グロリア」 ↓ 聖書朗読後の典礼聖歌 ↓ 信仰宣言「クレド」 ↓ 奉納唱 ↓ 叙唱 ↓ 感謝の賛歌「サンクトゥス」 ↓ 主の祈り ↓ 平和の賛歌「アニヌス・デイ」 ↓ 聖体拝領唱

ミサ曲としてはこの中から「憐れみの賛歌」「栄光の賛歌」「信仰宣言」「感謝の賛歌」「平和の賛歌」の五つが作曲される場合が多い。

「レクイエム」というのは死者に対するミサの音楽だが、典礼の冒頭の入祭唱が「休息を」というラテン

語で始まるところから、そのように呼ばれる。儀式そのものは《入祭唱↓憐れみの賛歌↓昇階唱↓詠唱↓読唱↓奉納唱↓感謝の賛歌↓平和の賛歌↓聖体拝領唱》の順に行なわれ、楽曲としては多くの場合この中の「憐れみの賛歌」「感謝の賛歌」「平和の賛歌」が中心になる。

同じ「レクイエム」という名がついていても、ブラームスの「ドイツ・レクイエム」、ヒンデミットの「レクイエム」、ブリテンの「戦争レクイエム」などは教会での典礼とは関係のない、コンサート専用の作品である。

スターバト・マートル（・ドロローザ）というのもよく音楽の題材として取り上げられるが、これは「悲しみの御母はたたずむ」という意味の、悲しめる聖母に対する祈りの作品である。

年末年始

外国で暮らす日本人、特に家族と離れて単身で暮らす者にとってクリスマスは大変つらい時期となる。

十二月二十四日のクリスマス・イヴ、そして二十五日、二十六日は一年の中で最も大切な、家族で祝う祝日である。店舗はすべて休みとなり、レストランも閉めてしまう所が少なくない。アパートの窓から近所の家々と、その暖かそうな部屋の中に見えるクリスマスツリーなどを眺めていると、外国生活の孤独感がひしひしと身にしみてホームシックにもかかりやすくなる。

運良く友人の家でのパーティーに招待され、クリスマスプレゼントのひとつも小脇に抱えて出かけても、そこでは友人の親兄弟や親戚など見知らぬ人ばかり。クライマックスになってプレゼント交換が始まって自分は何ももらえず（クリスマスプレゼントは普通何日も前からクリスマスツリーと共に贈り相手の名前をつけて飾られている）、結局とぼとぼと寒い中を帰る羽目になりかねない。